

笑顔いっぱい

夏号
(第52号)

発行日／平成29年7月20日

発行・編集

福島生協病院広報委員会
広島市西区福島町1丁目24番7号
TEL 082-292-3171 (代)

ホームページアドレス

<http://www.hch.coop/fukushima/>

第7回福島被災地視察・支援連帯行動に参加して

福島生協病院 医療相談室 岡野恵美

I) はじめに

東日本大震災、福島原発事故から6年が経過した今、福島県では未だ8万を超える住民が、県内外へ避難生活を強いられています。原発事故の避難者は、事故そのものによる被害を始め、国や東電による被害区域の線引きによる「分断」、不当な「機関政策」による被災者の切り捨てによって今も苦しめられています。原発での労働者問題では、劣悪な労働環境・条件の中で、多くの労働者達が今も事故終息に向け、命をかけ除染作業を続けています。労働者含め福島県内外へ避難した人たちの命と心と暮らしが、3・11の震災と原発事故後、どのように変わってしまったのか、視察を通して知り、また原子力政策も学びながら、第8回の連帯行動へのバトンを繋げていきたいと思っています。

II) 目的

- ① 福島の被災地の視察を通じて、原発事故の被害の実相を把握する。
- ② 福島第一原発事故を通じて原発問題及び日本の原発政策について学び、原発ゼロを目指す運動の担い手を養成する機会とする。
- ③ 被災地の人々及び被災地で民医連職員として奮闘している職員に寄り添い支援し、今後自分たちに何ができるかを考えるきっかけにする。

III) 期間 / 参加者数

2017年3月24(金) 13:00～26日(日) 12:00
21名(全日本含)

IV) 1日目

▼ 楢葉町民との懇談

いわき駅に集合後、マイクロバスで楢葉町へ向かいました。車内からは、田畑に囲まれた穏やかな田舎の景色が続いていましたが、所々で大量のプレコ

ンパックが置き去りにされていました。汚染ゴミのために仮置き場とされた畑は、二度と農作物を育てることはできません。結の里という社会福祉施設に到着後、4人の楢葉町民の女性から被災時・被災後の話を伺いました。原発事故発生後、すぐ避難命令が出て町を離れたそうですが、当時は「また数日後には戻ってこれるだろう」と思い、最小限の荷物で故郷を離れたそうです。しかし事故後の報道で、自分達が故郷から追われてしまったことに気付かされていったと話しました。いわき市内の避難所を転々とし、市の運営する復興住宅へ生活の場を移した人達の心と身体は疲弊していったと言います。国から支給された補償金を自宅の再建に使えば、周囲から妬まれる目で見られたりしたという方もいました。ある方は「事故以降、町民同士で原発事故後の苦労を本音で語り合うことはない。あの日を境に、身体は故郷に戻れても心だけが置き去りになってしまった。もし2回目の原発事故が起こっても楢葉町から離れたくない」と痛切な思いをお話し下さいました。それから原発周辺にある町村の多くは農家で、そのほとんどが放射能汚染によって、除染作業を余儀なくされたそうです。避難指示解除が出されるまでの間、町にはいのししやアライグマなどの野生動物が大量繁殖し、畑を荒らしたため、元の生活を取り戻すためには、その駆除に追われたと田舎ならではの苦労を話されました。2015年9月5日から避難指示解除が出ている楢葉町では、解除された今、町民の約6%(約7200人)が戻っています。しかし40代以下の町民が戻っていることは少ないと言います。その理由は仕事がない、病院・福祉施設・商業施設が不十分、放射線量や原発への不安などでした。解除されても、これからの生活への不安と放

射能への恐怖により「帰りたくても帰れない町民」が多く残されていることをお話されました。

その他、当時結の里へ通所や入居で利用していた精神・知的障害の方々を抱えながら避難したエピソードも聴かせて頂きました。いわき市内の避難所へ行っても、多くの避難者で埋め尽くされ、新しい環境に対応出来ない障害者は他の避難所へ移動する他なかったと言います。最終的には法人の知人の自宅へ避難することで何とか命を守ることは出来ましたが、その後も葉の確保にとっても苦労されたそうです。震災や原発事故からの避難は、子ども、障害者、高齢者、病人などの社会的立場の弱い人への影響が最も強いことを思い知らされました。



▼学習会 I 「東京電力福島原発事故発生から6年目の福島は今」

原発事故被害いわき市民訴訟原告団長である伊東達也さんからは、

- ①原発事故から丸6年の福島
- ②福島第一原発事故の国の責任
- ③原発をなくす国民的合意と運動の発展に向けた3つの題目で話を伺いました。

6年経過しても増え続ける汚染水があり、地下水は未だコントロールされていません。排気筒にヒビが入っていたり、堤防が仮設で済まされているなど、いつ起こるか分からない地震や津波への対策につながっていないことが分かりました。そのような状況で今年度4月、飯館村、浪江町、川俣町、富岡町で帰還困難区域を除いた帰還宣言が出されました。政府や東電は就労損害賠償を2015年2月に、避難区域外からの避難者に対する住宅補助は前年度の3月

末に、それぞれ打ち切りとしました。精神的損害賠償においては、来年3月に打ち切る方針を出しています。これは2020年の東京オリンピックまでの終結を目標にしているからです。一般市民の命や生活への保障が後回しにされていることが分かりました。健康や生活への保障が十分ない中で国の一方的な帰還宣言だけが出ても、子を抱える家庭は特に帰還しないと考えられます。



その子どもにおいてですが、甲状腺がんの問題に国は向き合わなければいけません。福島県の調査では、2016年9月までのがん確定と疑いが1巡目の検査で115人/37万人。2巡目で同68人の合計183人と判明しています。183人に限らず、子どもたちへの継続的な健康診断、検査と医療体制の充実が長期的に必要と話されました。また、『放射能がうつる』という言われ方を受けるなど、避難先でのいじめ問題、被災者への誤った理解・歪んだ見方、『いわき市民の税金を食っている』『原発御殿とは仲良くしない』など、被災者同士の対立にまでさせている原発事故の影響は明らかでした。

故郷と生活を追われた被災者たちは、現在原発事故の集団訴訟として全国各地で立ち上がり、闘っています。3月17日にあった前橋地裁では、137人の避難者に対し15億円の損害賠償を求めた判決で「国と東電は津波を予見し事故は防げた」と判断されました。国・東電に過失があったことを認め、約3855万円の支払いを命じたことが大きく取り上げられました。この判決は、国と東電の責任を初めて認め、今後の原発事故をめぐる訴訟もこの判決につながれる闘いが強く求められています。当時この判決の裁判長は女性で「自分が裁判長である間に結論を出したい」との意向を示していました。明らかな身体への影響でなく、精神的慰謝料も加味した判決を出したのは、国民の命や暮らしを守った司法判決であると感じました。しかし驚いたのは、この判決を出した女性裁判長は、今後地方へ左遷されたという話でした。広島民医連MSWも訴訟支援に関わっているので、闘う姿勢に寄り添えればと思いました。

V) 2日目

2日目の夕方は、学習会Ⅱ「労働者から見た原発事故～実態と改善の運動～」という題で、いわき市市議会議員の渡邊 博之氏から話を伺いました。

2011年3月15日に発生した、福島第1原発の4号機の水素爆発は、使用済み燃料プールの水がなくなる最悪の事態を想定し、250km圏内（東京と神奈川の一部を含）の住民を避難させることも検討していたと知りました。4号機の使用済み核燃料は、10万シーベルトの放つ放射線量です。

人間は100シーベルトで即死ですが、このような状況下の原発に、作業員は上下の下着、タイベック2枚、綿手、頭巾、ゴム手3枚、軍足3枚、足カバー、フルマスクを装備し、10kgのタングステンベストを着用して作業に当たっていました。食事は水とパンのみ。1度防護服を着用すれば休憩時間以外にトイレに行くことは出来ず、水も飲めません。長期間、被爆事故との隣り合わせの中での労働のため、労働者には被曝線量と体力的・精神的疲労が積み重なり、倒れる人もいたそうです。結果として人手不足になり、今度は未経験や新人作業員に同じ作業をさせるため、原発事故現場での作業中の事故が続きました。しかしそのような事実は、議員や報道関係には知らされず、それよりも視察時に作業を一旦中止させられ、目や耳に知らされないように行われていたことを知りました。当時20代だったある原発労働者は「原発は安全と信じて推進する立場だった。事故収束の作業は誰かが犠牲になってやらなければならない。自分は原発を動かしてきた責任があるので、死を覚悟して働いた。現場はまさに戦場で、広島や長崎はこんな感じだったのかと考えた。夜は避難先のいわき市の体育館で眠り、今日自分は死ぬかもしれないと思いながら原発に向かった」とこのような発言を残しています。

もちろん、問題は賃金にもあります。作業員は、常に被曝への恐怖と隣り合わせの中で働いているのに、ある作業員の賃金は日当1万2千円で、これに危険手当が付き1万5千円/日。技術のある作業員は3万の日当で募集していましたが、請負業者のピンハネが原因で、手元に届くのは1万弱。多くの作業員にはその程度の日当しか与えられないため、経験豊富な作業員には不満やねたみが蓄積、労働意欲も低下して辞めていってしまうケースも後を絶たないそうです。プレハブの宿舎では相部屋が基本で、作業していない間でも休まることはないそうです。健康不安を訴え、特に甲状腺への心配は強く、家族

から「子どもの障害が心配だから遺伝子検査をしてほしい」と言われたり、そもそも原発で働いていることすら話してない労働者もいることが分かりました。東電には健康相談窓口を設置していますが、H28年度の相談件数はゼロ、その前は数件と発表しています。相談すると、翌日に解雇されるか会社の責任が問われてしまうからです。あってないような相談窓口であることを知りました。

それから、原発事故作業の現場や労働環境がどのようなものかも知られず「ただいわきに行けば仕事があるだろう」と思い来た作業員もいます。そうした人たちが雇い止めを受けると、路上生活、ネットカフェ生活になり、生活保護受給者になっているのが、事故発生から6年経過して新たに起こっている問題です。原発事故による被災者支援問題が公に出る一方で、現場の実状を知らされる機会はほぼありません。渡辺さんの講演全てが、心が痛む内容ばかりで、もっと周知させるべきだと感じました。



VII) 感想

本当に内容の濃い2泊3日で、参加させていただいてよかったと思います。様々な事情で避難を決定した人、しない人、出来ない人がいて、それぞれが今置かれている中で必死に元の生活に戻ろうと奮闘し続けていると感じました。率直に応援したいと思いました。しかし今でも何が出来るのか分かりません。言えるのは、2泊3日に感じたことをいろんな人にも感じてほしい、とりあえず福島へ行ってみて感じてきてほしい!!という気持ちです。

それと今、広島民医連のMSWが原発事故訴訟の陳述書の支援に携わっていますが、この2泊3日を通して、原告者から語られるエピソードをより想像しやすくなったと感じています。原告者の命と健康、暮らしを守る闘いの伴走者として、担当弁護士さんとのパイプ役として、思いを揃えられる支援が出来ればと思っています。参加出来るよう、送り出してください、ありがとうございました。

夏を乗り切る～暑さに負けない食事を～

福島生協病院 栄養科

夏の太陽をたっぷり浴びて育った夏野菜、本当のおいしさはこの時季だけのものです。夏野菜はたっぷりの水分を含むため体温を下げ、種々のビタミンは体の調子を整える働きがあります。生食や、簡単な調理でおいしく食べられるのも特徴です。今回は夏野菜を使った料理を紹介します。



エネルギー 666kcal 蛋白質33g 塩分1.4g

	材料（1人分）	分量	作り方
レモンパスタの 夏野菜添え	鶏むね肉 こしょう オリーブ油 レモン汁 片栗粉 パプリカ赤黄 ズッキーニ 玉ねぎ トマト 酢 メープルシロップ 水 塩 スパゲッティ 塩(茹で汁使用分) レモン(無農薬) みつば 塩 にんにく オリーブオイル	60g 少々 5g 7g 少々 各1/4個 1/4本 1/4個 1/4個 40g 8g 10g 0.5g 70g 0.2g 1/2個 少々 0.5g 少々 5g	野菜マリネ ①Aを混ぜ、マリネ液を作る ②トマトは湯むきし、一口大に切りマリネ液へ ③鶏むね肉はそぎ切り、野菜は一口大に切る ④ボウルに鶏肉を入れ、☆を加え片栗粉をまぶす ⑤鶏肉を火が通るまで焼き、マリネ液に浸す ⑥トマト以外の野菜を炒め、マリネ液へ浸す パスタ ①レモンは5ミリの半月に切り、2枚を飾りにする 残りの皮はすり下ろし、果肉は搾る ②にんにくを粗みじんにする ③フライパンにオリーブオイルを熱し、にんにくを炒める ④スパゲッティを茹でる 茹で上がる1分前にフライパンへ移し茹で汁を入れながら塩で味を整えレモンを入れる ⑤半月切りのレモンと、みつばを飾る
冷製えだまめ 豆腐	枝豆 水 粉寒天 水 だし汁 醤油 みりん 片栗粉	25g 40g 0.2g 40g 75g 0.7g 0.7g 少々	①枝豆は茹でて薄皮を取る ②Aをプロセッサーにかけ、なめらかにする ③鍋にBを入れ沸騰させ、粉寒天を溶かす ④火から下ろし②を加え器に流し、固める ⑤鍋にあんの材料を合わせ煮立て片栗粉でとろみをつけ、④が固まったらあんをかける
オレンジと人参 のまるごとジュレ	人参 オレンジ ゼラチン	15g 1個 1g	①オレンジを半分に切り中身をくりぬく ②人参を茹で、軟らかくなったらくりぬいたオレンジと一緒にミキサーにかける ③②を火にかけ、沸騰直前に火を止めゼラチンを加える ④オレンジの器に流し、冷やし固める

●基本理念●

私たちは、患者さんの立場に立った医療を実践します。

基本方針

1. インフォームド・コンセント(説明と意思決定)を重視し、信頼される医療を提供します。
2. 教育・研修活動をすすめ、医療、看護、接遇の向上につとめます。
3. 地域の人々とともに、医療、福祉、介護のネットワークづくりをすすめます。

編集 後記

夏、真っ盛り！暑さが身に堪えますが、海に花火に胸が躍ります。

はしゃいでしまう季節ですが、熱中症には気をつけましょう！（A）

